

選択課題Ⅰ パンデミックの渦中において

佳作

## 私はあなたと共にここにいる

——うつ病社会と『ペスト』の連帯

佐々木大樹

(東京都／私立学習院高等科三年)

とても大切な人へ

一、はじめに

二〇二〇年二月二十六日、新型コロナウイルス感染症に伴うエビデミックによって当初最も甚大な被害の及んでいたイタリアで一人の思想家が疫病とセキユリティにまつわるごく短い文章を公開する。以後三月から五月にかけて連続的に発表されたそれらの論考はロックダウンや様々な規制に対する激しい怒りを含んだ生権力批判を展開し、読者の議論を呼んだ。一連のテキストの書き手ジョルジョ・アガンベンはその中の一編「一つの問い」において次のように述べている。

身体的な生の経験と精神的な生の経験はつねに、互いに分離できない仕方です。にまともなものが、私たちはそれを、一方の純粹に生物学的な実体と、他方の情感的・文化的な生とに分割してしまつた。(…)このようなありかたが、今日そうなるうとしてるように、それに固有な空間的・時間的境界の先にまで拡がっていき、一種の社会的な振る舞いの原則になつてしまふならば、私たちは出口のない矛盾に陥ることになる。(一)

アガンベンのいささか過激な筆致やコロナウイルスそのものへの認識の甘さを批判するのは容易いとしても、しかしなおこの指摘には重要な点があるのではないだろう

か。

彼の認識によれば、本来分割できない一つの統合としてあつた「人間」への理解は今やくつきりと二つに分かれてしまつていゝる。それは人間を文化的(精神的)営みによつてより良く生きようとしていゝる存在として定義することと、人間を生命として身体的/動物的な現実から定義することの対立だ。パンデミックという危機的状況において何よりも人命が問われている以上後者の人間観が決定的に優位となるにしても、しかしそれが私たちのあり方そのものを大きく変容させる恐れにアガンベンは声を強めて警鐘を鳴らすのである。

人命が何にも増して重大な課題でありそのためにも多くの行動を自粛しなければならぬような現今の時間では、その命の深層において深く喜び悲しむことのできるこの人間の精神のあり方にまで気を配る余裕や発想は難しい。ここでこの命という言葉は身体の諸器官が適切に動いていゝるかどうかといった専ら即物的関心の謂いであり、数値化可能なものという意味である。だが心は、数や目に見える形で表すことができない故に、その喜びや悲しみがどれくらいか深さなのか容易には判別しにくい。つまり身体

の即物的問題にこだわらねばならない局面は、その反動として目には見えにくい心の問題をおざなりにしがちだということである。アガンベンの指摘はその意味で正鵠を射ているというべきだろう。

心の悩みに対する適切なケアの欠如が、私たちに問題として浮かび上がってきた。

数値的データに頼らなければならぬとしても、日本のうつ病率はOECDの調査によれば二〇一三年七・九%に対し二〇二〇年は一七・三%とほぼ倍近い数値へと増加している。(2)

小中高校生の自殺者数が四九八人と統計以来もっとも多い数字となったことも特筆すべきだ(3)。従来の生活を少なからず変えることを人々は求められたが、それに伴う声に出せない心の痛みに対して十分に寄り添うような環境が整備されていたのかどうかは以上の統計が既に答えを述べているのではないだろうか。

コロナ禍でのうつ病や(若者の)自殺者の増加は、ある意味で二〇二〇年以前の社会に内在していた問題を明るみに出したものとして認識すべきだろう。新自由主義的風潮を背景とする自己責任論は悩みを「共有」という発想自体と折り合いが

つきにくく、そこでは私は私、他人は他人という明確な線引きが施されていたと言っ  
てもよい。

本稿は昨年小林秀雄賞を受賞し話題を呼んだ「ここを病んだらいけないの?」うつ病社会の処方箋(4)の副題に倣ってパンデミック渦中のこうした社会を「うつ病社会」と捉え、少しでも住みやすくするためのありべき倫理を課題の一つとして検討してゆく。

ところで、コロナウイルス感染拡大当初  
或る一冊の小説がにわかに注目を集め出していた。アルベール・カミュ『ペスト』である。それは疫病の流行による人々の混乱や政府・行政の機能不全などを「いま、ここ」で直面しつつある現実を七〇年以上前に正確に描写していたことへの深い驚きを伴って再び受容された。

本稿の第二の課題はこの『ペスト』を「うつ病社会」という今日的課題に対する処方箋として読み直し新たな『ペスト』像を試論として提出することである。キーとなるのは「友」と「連帯」という語彙に秘められた複雑なニュアンスだ。

本論の議論は『ペスト』を再考することから上記の課題に迫ることをその方法論と

しており、以下の叙述はカミュの読解にその多くが充てられることとなる。つまり第二の課題を中心に考察することによって、そこからの帰結として第一の課題に一条の光を見出すこととなるだろう。

## 二、言語と身体

カミュは不条理の作家と呼ばれている。

しかし彼にとって「不条理」がいかなる事態を指したのかはあまり説明されない。カミュという名前が出た際その場をごく穏当にやり過ごすための紋切型として、それらの語句は用いられている。不条理とは一体どのような事態なのだろうか。

中条省平は「カミュ伝」の中で不条理をコンバクトにこう纏めている。

不条理とは、人間がならこの世界の特権的存在ではなく、人間をふくめて世界は無意味だということの明確な認識であり、その認識自体が無意味であることの甘受です。(5)

この不条理観に立った時、世界は、「意味」という安定した支柱によって統御され秩序立った状態から、一気に曰く言い難い過剰

な何かへと変貌する。それは私と世界には本来何の繋がりもないという鋭利な真実を暴き立てるものだ。だが「不条理」という概念がカミュにとって故郷アルジェリアの海と太陽に代表される美しさと、戦争・病・貧困という過酷さの二面性を集約した圧倒的現実の謂いだったことを忘れてはならない。

不条理とは、つまり人間の合理的思考の枠組み（意味）へと回収することに失敗し世界の実相と直面し続ける危機的体験と要約できるだろう。

また「意味」は物事の価値を決定しようとする態度の別名であり、正邪善悪を司るものだ。「意味」は一つの行為が正しいか悪いかを常に決定しようとする。「意味」は行為を俯瞰する。『ためらいの倫理学』の著者内田樹が「意味」という語句に含まれていたニュアンスに対して「第三者」や「上位の審級」という言葉を充てがったことも留記しておきたい。（6）

ところでカミュは『ペスト』で次のように記していた。

僕がいつているのは、この地上には天災と犠牲者というものがあるといふこと、

そうして、できうるかぎり天災に与することを拒否しなければならぬということだ。（…）僕は、間違いのない道をとるように、明瞭に話し、明瞭に行動することに決めた。だから、天災と犠牲者というものがあるといふのだし、それ以上はなんにもいわないのだ。（…）自身自身が天災となるようなことがあつたとしても少なくとも僕は自分でそれと同じ意ではない。（7）

「僕」（タルー）の認識には「意味」が欠如している。「天災と犠牲者」は「加害と被害」という価値判断的二項に決して交換されることがない。ここには、苦しんでいる人間をただしっかりと見つめる明晰な眼差しが光っているばかりだ。

何の前触れもなく、「意味」の範囲を遙かに超えた大きなうねりとして天災はやってくる。うつの苦しみもまた同じだ。うつ発作もまた（多少の時間的規則性はあるにせよ）何の前触れも必然性もなく人を突き刺し「意味」を考える知恵を奪ってゆくものであり、主体はただ過ぎ去るのを待つばかり対策がない。

向こうからやってきた「意味」を測りえ

ない大きな災いとそれに打ち拉がれる「犠牲者」の関係を、こうしたうつの精神状態の一人の裡の出来事として読み替えることはできないだろうか。「私」という最も管理できると思っていた内側の世界に全く統御の効かない不定形のマグマのような暴力的他者が潜んでいる点こそすぐれて不条理な事態であるように思えてならない。

誰かが殴り私が殴られたのならば、事態は加害と被害といった言葉で説明をつけることができるだろう。けれどもうつは一人の人間の内部で完結している。うつの原因が特定できない場合は尚更だ。精神を襲う魔物が内部に住んでいるという意味で主体は恐ろしい暴力性を内に秘めた存在であり、しかし同時にそこには発作のために命すら捨てようとする紛れもない「犠牲者」が同居している。わかりやすい形での加害／被害、能動／受動の物語はここでは機能しない。

それでも何としても「犠牲者」の側に、つまり心の不調を訴える者に寄り添うことをタルーはその倫理としているのだと解釈した時、苦しむ者と寄り添う者の間のあるべき関係を更にそこから導き出すことはできるだろうか。

寄り添う者は、苦しむ者の精神的痛み（身体）に到達することができない。励ましは言葉による他ない。寄り添いとしての連帯はここに困難がある。精神的痛みを少しでも軽減するためには、「言葉」という武器を使わざるをえない。カミュは「抽象と戦うには、多少抽象に似なければならぬ」と述べる（8）。他者と連帯するためには、言葉が必要なのだ。しかし同時に言葉に対する完全な信頼感も彼にはない。身体感覚を忘れた言葉が観念に走りだけ果てしない暴力を生み出してきたかをカミュはこの体で経験してきた。観念論に振り切った時、人は言おうと思えばどのような事も言えてしまう。全く当事者に寄り添わない観念的な言葉／励ましは却って当事者を苦しめる。カミュは言葉を書く時、実の母が難聴で絶えず黙っていたことを念頭に置いていた。母の沈黙＝身体を「表現」するためには言語の極へ飛躍せねばならないが、しかし同時に言語の観念性に安住することなどその圧倒的な現実が許さない。

苦しむ者を癒したいにも関わらず、苦しむ者の沈黙の前で人は為す術もなくなつていくしかないということ。身体と言語は互いを引つ張り合い、人間は二項の間で引き裂

かれることとなる。

### 三、引き裂かれる者

内田樹はその代表作『レヴィナスと愛の現象学』にレヴィナスの次のような言葉を引用している。

人間とは何か。それは一個の存在者であるためには一でありつ二であるということである。実存のただ中であつて分断され、引き裂かれてあること。（9）

連帯する時、私達が立ち会わなければならない事は「引き裂かれ」だろう。一人の人間が言語と身体、観念と現実の間で引き裂かれる。

連帯は友と友の間の出来事だ。意味＝上位審級を捨てた時、人は神の救済という考えもまた捨てたのだ。ここにはただ対等な関係の「友」がいるのみである。聖職者に「友」という発想はない。『ベスト』に登場するパヌルーは「修道士には友というものはありません。すべてを神にささげた身ですから」と述べる（10）。しかし神による意味付けにもう人間は頼ることができないとカミュは考えた。顔と顔を見合す

ことのできる「対等な関係」＝友（均衡の原理）がここでは基本となるのだ（11）。

この「友」も、また或る種の引き裂かれた立場だろう。「友」は苦しむ者と同じ人物ではないが、同時にその人と赤の他人というわけでもない。近いようで遠く、遠いようで近いこうした関係が何とかその絶対的な間隔を埋めようと運動する事の内に「連帯」という行動はあるのではないだろうか。

「私」は友として、苦しんでいる「君」に言葉をかけようとする。しかし言葉を放とうとしたまさに瞬間、「私」はその言葉が纏ってしまうようにもならない軽さの前に怯んでしまうのだ。投げかけようとする言葉は、どんなに字数を増やしても「君」の感情／身体に釣り合わせる事ができない。「私」は「君」のために言葉をかけようとするが、しかしその軽さと無責任さを考えれば考えるほど言葉は呑み込まざるをえなくなるだろう。相手の（無言の）「身体」が、「言葉」を撤回させる。それでも「君」は依然として苦しんだままだ。

この絶望的ねじれの中にこそ「連帯」の萌芽があると私達は考える。言語と身体、慰めようとすることと黙ることの間の、どつちつかずの状態で戸惑いたためらいながら

引き裂かれている状態の裡に「連帯」の可能性を考える。

引き裂かれを生きる者は、どちらか一方の極に決定的に身を置くことができない。それは中途半端にもう一方の極との間を行ったり来たり往還する。この立場を生きる人間は、不断の転向者であることを余儀なくされるのだ。カミュの作品は「連帯」と共に「反抗」をそのテーマとしているが、それは「反抗」（正義）のためならば暴力も辞さないような自分にもう一人の自分（慈愛）が「反抗」し、しかしやはり不条理のために闘争して「反抗」（正義）せねば、だが……と考える一人の人間の「たえざる前言撤回」の終わることない運動性の物語でもあった。「反抗」は、私自身がそれを「反抗」することによって常に空転し失敗し続ける。しかしそこにはついこの間までの主張と正反対のことを述べ転向を繰り返していることへの「痛み」と「疚しさ」が眠っている。それはいま本論で行われている議論と接続すれば、言葉と沈黙の葛藤それ自体に生まれるどうにもならなさへの「痛み」の謂いでもあるだろう。

「引き裂かれた」人間は、前言撤回をその日常とする以上、歴史の勝者となること

ができない。歴史に残るためには、多少なりとも極端であること、声を大きくすることを余儀なくされる。けれどもカミュは「ベスト」にこう記していた。「僕は自分で敗北者のほうにずっと連帯感を感じるのだ。（…）僕が心をひかれるのは、人間であるということだ」（12）

ここでの「敗北者」には、悩み苦しむ人間と共になんとか寄り添おうとしながら引き裂かれ戸惑っている者も含まれているはずだ。そしてこのような「敗北者」こそを、カミュは（まるでレヴィナスのように）「人間」と呼ぶ。

引き裂かれた人間は、こうして常に動き続け捻りながら結局はたとえ「私はあなたと共にここにいる」といった少ない言葉で連帯を表明することしかできない。つまり悩んだ末にとつともなく凡庸な言葉しかかけることができない。しかしそれは目の前の人の苦しみに追いつこうとしながらも言葉に詰まってしまった痛みと疚しさからやつとのこと生み出した言葉でもあるのである。

では、この凡庸な言葉は全く相手に届かないのだろうか。ここで大澤真幸がその三島由紀夫論で語ったことが意外な補助線と

なる。大澤はこう述べている。

あなたが、心底から愛している人に、その真情を告白しようとする場面を想像してみるとよい。（…）あなたは、いろいろ言い換えようとするが、あれもちがう、これもちがうという気分になる。（…）要するにあなたは、相手に真実を語ることに失敗する。では、あなたの思いは、相手にまったく伝わらなかつただろうか。ちがう。相手の人は、あなたの深い愛情を理解しただろう。（13）

人間と人間の「関係」において、凡庸な言葉の「意味」は、開示される瞬間があるのである。その時、私達は心が少しだけ楽になっていることを感じるだろう。それがおそらく「連帯」の時だ。

「連帯」とは、こうした切実さの中から言葉を痛みと引き換えにひねり出す動作によってかろうじてその輪郭を描き出せるものなのである。

#### 四、「痛み」を忘れないこと

カミュの思想を一言でまとめるならば、それは、引き裂かれという言葉である。

人間は「身体」に留まっている限り他者

と共生することができない。けれども人と人とを繋ぐ言語の極に振り切れれば、やがて観念的になり身体の痛みを忘れて主張を異にする人間に暴力的となる。人間はその活動を送るために言語的動物として生きなければならぬ。しかしそれが観念によって他者を平気で痛めつけるようになるまさにその時、身体がそれに「反抗」して人があるべき姿へと引つ張るのだ。つまり人間は完璧な言語的動物として生きることができない。この二つの間でカミュ的な倫理を引き受けた人間は揺れ動かざるを得ないだろう。

もし仮にそうした人間に生きる場所があるのだとしたら、それはきつと言語と身体どちらの極にも属していながら同時にまたどちらの極からも決定的に隔たってしまった孤立した或る閾値としての波打ち際だけだろう。それは常に「ためらい」続けるといふ高度な運動性ゆえに止まっているように見える或るフィクショナルな「中間」の一点である。その一点をたえず求めようとする限り、歴史は遠く離れ、私たちは敗北者となるだろう。

敗北者が持っている唯一のもの、それは「痛み」である。

敗れたことのこの切実な痛みのヒリヒリとした感触こそが、人を連帯へと駆動する原動力たり得るのではないだろうか。つまり、悩んでいる「君」に寄り添い労ろうとしても上手く言葉に纏められなかったどうにもならない経験に対して湧き上がる胸の痛み／苦しみによって、「私」はもつと「君」と一緒にここにいようという気持ちを引きだてられるのだ。連帯は、「私」が「君」の悩みに対して常に遅れており決して追いつけないという事実によって構成される。

この時「共感」のフランス語 *compassion* と *sympathie* が、どちらも語源として「共に (con. syn)」「苦しむ (pati, patios)」だったことを思い返すべきだろう。他人に共感し感じる「痛み」とは、その人に対して自分が遅れてしまっただけではないことへの疚しさと苦しさにも由来するものだ。「君」は苦しんでいる。それを少しでも改善させようと腕く「私」もまた、自分に事態を好転させる術のないことに苦しむ。

「共に苦しむこと」とは、「私」にとつてその人に成り代われないことへの絶望的な苛立ちであり、その人の苦しみにへとなんとか追いつこうとする果てしのない努力であり、その人の沈黙と釣り合う言葉を紡ごう

とすることの痛みである。人は他人の苦しみを完璧に理解できることもある。自分がかつて経験した事柄ならば特にそうかもしれない。だがどんな悩みなのかは判らないがとにかく苦しんでいる他者としての隣人（君）に対しても、この「共に苦しむ」という語源から見た「共感」の概念は極めて有効ではないだろうか。ここでの「私」と「君」の苦しみはそれぞれ別の種類のものである。けれども共に苦しむ（≠共感）ということを通じて孤独が晴れ、少しでも世界が優しく映るのならば、それはとても美しいものだと思ふ。

言語からも身体からも遠く離れたところで、しかし何となく人と生きることを求めようとする「寄り添う者」の「痛み」を忘れてしまえば、どんな共生のためのアイデアも、連帯も、絆も、多様性も、すべては無機質なゲームの中のファクショナルな意匠に過ぎなくなる。もし私達が多くの人と共に生きようと本当に思うのならば、おそらくこの「痛み」は忘れてはならない種類のものだろう。

言語と身体の間、理想と現実の間、この痛みを忘れないこと。それは単純であると同時にとつてもなく高貴な倫理とし

て、私たちの前に聳えている。

そしてアルベール・カミュは、私たちが本稿でたえず参照してきた一九四七年のテクスト『ベスト』に、こう書き記すのを忘れていなかった。

ちょっと沈黙があった後、リウーは少し身を起こし、そして心の平和に到達するためにとるべき道について、タルーには何かはつきりした考えがあるか、と尋ねた。

「あるね。共感 (a sympathetic) ということだ」(14)

参考文献

注(主な引用・参考文献)

- 1 ジョルジョ・アガンベン 高桑和巳訳 『私たちはどこにいるのか? 政治としてのエビデミック』青土社 二〇二一年 八二頁
- 2 下記参照(最終閲覧二〇二二年八月二五日) <https://www.oecd.org/coronavirus/policy-responses/tackling-the-mental-health-impact-of-the-covid-19-crisis-an-integrated-whole-of-society-response-Occafab/>

- 3 下記参照(最終閲覧二〇二二年八月二五日) <https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2021/55066>

- 4 與那覇潤、斎藤環 『心を病んだらいけないの?——うつ病社会の処方箋』新潮社 二〇二〇年

- 5 中条省平 『カミュ伝』集英社インターナショナル 二〇二一年 六七頁
- 6 内田樹 『ためらいの倫理学——戦争・性・物語』角川書店 二〇〇三年

- たとえば「第三者」については三〇九頁、三二一〜三二三頁、「上位の審級」については三〇六頁(上位審級)、三一五頁(上位者)、三二〇頁(上位の裁定者)、三二二頁(上位の審級)など参照。
- 7 アルベール・カミュ、宮崎嶺雄訳 『ベスト』新潮社 一九六九年 三七七〜三七八頁
  - 8 カミュ前掲一三三頁
  - 9 内田樹 『レヴィナスと愛の現象学』文藝春秋 二〇一一年 三五二頁
  - 10 カミュ前掲 三四五頁
  - 11 内田二〇〇三前掲 三〇九頁
  - 12 カミュ前掲 三八〇頁
  - 13 大澤真幸 『三島由紀夫 ふたつの謎』

- 14 集英社 二〇一八年 一四二頁  
カミュ前掲 三七九頁

更なる参考文献(本稿の成り立ちに直接間接影響を与えたものをやや網羅的に) 内田樹 『レヴィナスとカミュ—存在論から倫理へ—』神戸女学院大学論集 一九九一年

- 『ためらいの倫理学——戦争・性・物語』角川書店 二〇〇三年  
『レヴィナスと愛の現象学』文藝春秋 二〇一一年

「意味しないものとしての〈母〉——アルベール・カミュと性差」一九九三年(前掲『哲学的』草思社 二〇二〇年所収)  
大澤真幸 『三島由紀夫 ふたつの謎』集英社 二〇一八年

中条省平 『人間とは何か 偏愛的フランス文学作家論』講談社 二〇二〇年  
『カミュ伝』集英社インターナショナル 二〇二一年

- 野崎敏 『カミュ 『よその』きみの友だち』みすず書房 二〇〇六年  
蓮實重彦 『へ美』について——谷崎潤一郎『疎開日記』から『小林康夫／船曳建夫編』『知のモラル』東京大学出版会 一九九六年

所収) 言語と身体の間引き裂かれという着想には常に蓮實の議論が念頭にあった。

與那覇潤、斎藤環『心を病んだらいけないの?——うつ病社会の処方箋』新潮社 二〇二〇年

與那覇潤『歴史なき時代に 私たちが失ったもの取り戻すもの』朝日新聞出版 二〇二一年

ジョルジョ・アガンベン、高桑和巳訳『私たちはどこにいるのか? 政治としてのエビデミック』青土社 二〇二一年

アルベール・カミュ、宮崎嶺雄訳『ペスト』新潮社 一九六九年  
<https://www.oecd.org/coronavirus/policy-responses/tackling-the-mental-health-impact-of-the-covid-19-crisis-an-integrated-whole-of-society-response-0ccafab0/>

このデータによると、アメリカのうつ病率は二〇一九年からの前年比で約二倍と大幅に上昇していることが記しておきたい。

<https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2021/55066>

<https://www.anthropomada.com/bibliothèque/CAMUS-La-peste.pdf>

フランス語の『ペスト』は上記を参照した。本稿末尾引用中の「共感」を意味する単語として、「共に苦しむ」を語源とする *la sympathie* が使われている。